

天 災

吉田は気候温暖の地、天災を知らない南予の楽土である。と、こういつてしまつては、いささか現状にそぐわない気がしないでもないが、ともかく一応は穏やかな町である。

もつとも、藩政時代の天災については、町誌上巻に列挙したように、ほとんど例年のごとく暴風雨、洪水あるいは早魃による損害を出している。しかし、この損害はそのほとんどが水田を主とした稲作の被害であるが、その実態をつぶさに考えてみると、これがすなわち吉田町の天災の実情を表わすものではないことに気がつくはずである。第一、その損害額の大部分は、吉田藩の穀倉といわれた三間川流域（現在の三間町を中心とする三間平野から鬼北にかけて）におけるものであり、また被害のありかたも、洪水あるいは早魃による直接的なものよりも、これにとまなう虫害のほうが、より重大な素因となつていたように思われる。水稲の品種そのものにも問題はあつたであろうし、農薬のいっさい無いころのことであるから、それも当然のことであつたにちがいない。治山・治水・土地改良・耕作技術、そのいずれをとつても、とつてい今日の比ではない当時のことであり、気象の長期予報など考えもおよばない時

代の話であつたから、虫害の予防措置も神頼み以外に何一つあるはずはなかつたと思われる。

しかし、この藩政時代の天災の記録を通して見ても、家屋の倒壊・流失・あるいは人畜の被害などきわめて僅少・軽微であることがよくわかるが、このことは、風水害の規模が広大な平野部をもつ他地方に比較していかに小さいかということを示している。この点、内海に面し、とくに河川の流域が狭く、背後を山々に囲まれた吉田町は、台風の進路との関係もあるが、まったくめぐまれた環境にあるといつてよい。

明治以降現在にいたるまでも、恒例のように台風はやってくるが、さいわいにとりあげるほどの災害も無かつたようである。昭和二十四年六月二十一日、日振・戸島両村の漁民二百余の生命を一举にして宇和海の波浪に覆滅し去つたデラ台風にしても、町内の損害は比較的軽微に終わつてゐる。しかし、戦時中におこなわれた町周辺山林の伐採と戦後においていちじるしく進展した蜜柑園造成の結果は、小規模ではあるが、ときにいわゆる鉄砲水の現象を招きかねない。昭和十八年七月二十一日の台風は、宇和島測候所の観測による同二十四日にかけての総降水量九四二耗が示

すような、まれにみる豪雨をとまな、吉田病院裏堤防の決壊と高潮により、東・西・北の三小路が冠水するという災害を招来している。

地震については、吉田陣屋町造成上の欠陥もあつたことだが、倒壊家屋八十数戸を記録した安政元年（一八五四）の大地震以来、さいわいに家屋の倒壊および人畜に被害をおよぼすほどの震災を経験していない。しかし、昭和二十一年十二月二十一日の南海地震（宇和島震度四）は、南予から東予地方にかけて四〇〜八〇程もの地盤沈下をきたしたといわれ、吉田町においても、被災した海岸地区における高潮対策として、道路の嵩上げ、防潮堤の造築など防災工事がおこなわれた。また、昭和四十三年四月一日の日向灘地震（宇和島震度四）につぐ同年八月六日の宇和島湾地震（宇和島震度五）は、震源が近かつただけにそのショックも大きく、余震が一ヶ月ちかく続いたことも記憶に新しい。

註 南海地震による地盤沈下は、吉田港付近で約一米、奥南の海岸部で約六〇糎、玉津で同じく八〇糎と推定されている。この地盤沈下対策事業として、昭和二三〜二八年度にいたる間に、農林・建設・運輸各省関係分を含め

て、道路・護岸の嵩上げ、防潮堤の改修、干場修築など延長約四・六耗にわたる防災工事がおこなわれ、昭和三〇〜三八年度には吉田港付近の防潮堤延長約九〇〇米が造築された。

以上述べたように、風水害や地震の災害に対しては、現在まで比較的安心してこられたわけであるが、つい最近になつて思わぬ天災に当面するところとなつた。すなわち、早魃と冷害である。ここ数年間にみられる世界的な異常気象に関係があるものかもしれないが、昭和四十二、四十四年の両度にわたる早魃は、温州蜜柑に大損害を与えた。四十二年は七月二十日より十月二十五日まで、四十四年は八月二十六日から十一月十五日まで、この間一滴の降雨もみなかつたのであるから、新聞紙上に南予沙漠と書かれたこともけつして大げさな表現ではなかつた。蜜柑園への灌水のために、農家は競つて井戸を堀り、山上にまでエスロンパイプを引きめぐらせ、揚水ポンプは終日なり続けた。遠く宇和島・津島あたりから河水を運ぶための、急造のタンク・ドラム缶を積載したトラックが、昼夜を問わず走りまわつたこともわすれられない。柑橘農家に早魃に対する不断の備えの無かつたことが、いっそう災害を大きくした

玉津と喜佐方における温度差

測定場所	昭和42.1.16測定最低気温
玉津 県立果樹試験場南予分場	- 4.6℃
喜佐方 鳥首池ノ端	- 9.0
喜佐方 中学校前	- 8.5
喜佐方 農協前	- 5.0

の相違はあるが、別表が示すように相当の温度差がみられる。摂氏マイナス二度で四時間、四度で二時間、マイナス六度になれば即座に被害が生ずるとされている夏蜜柑だけに、この異常低温による損害もまた甚大であった。

早魃にしろ冷害にしろ、昔から温暖多雨とされてきた土地柄であるだけに、農家のうけたショックは大きかった。

ともいえるが、一方この事態は、予想することもできないほどの特異な現象、思いがけぬ天災であったということができよう。

冷害は主として夏蜜柑がうけるところの天災である。昭和四十二年一月の上旬から旧正にかけての異常低温は、玉津で最低摂氏マイナス四・六度を記録しているが、比較的日照時間の多い海岸地帯の玉津方面と、山一つへだてた喜佐方・立間地区では、もちろん標高差・風向・場所など環境によってある程度

これらの被害状況についてはいずれも別表で示すが、このことを考えてみると、旧藩時代の水稲を中心とした町の農業が柑橘栽培主体へと大きく転換した今日、私たちがうけるところの天災による被害もまったくその性質を異にしていたことに気がつくし、これに対応する施策もまた異なった観点からなされることが肝要だと思われる。早害および

昭和42・44年の早魃による被害額

項目	42年度	44年度
農作物被害	1,774,910	670,020
樹体被害	2,970,332	1,807,399
応急対策事業費	293,968	—
燃料及用水運搬費	315,658	—
計	5,354,868	2,477,410

註 農作物被害は温州蜜柑、応急対策事業には、貯水槽・揚水ポンプ・配水管施設がある。(吉田町産業課調)

昭和43年の冷害による被害額

項目	千円	千円
農作物被害	232,320	夏蜜柑
樹体被害	159,260	夏蜜柑
計	391,580	

(吉田町産業課調)

び冷害対策が、ひとり農業当事者にかぎらず、吉田町にとっての重要課題となっていることはいうまでもない。

生 物

予讃線の下り列車が下宇和駅をすぎ法花津トンネルを抜けたとたん、その眼前に展開するのは、宇和海に面した玉津の山々、山裾から頂上まで、見事に開墾しつくされた蜜柑園の風景である。いままで見馴れてきた宇和高原のそれとはまったく異なった林相が、蜜柑王国吉田町の実態をまざまざと旅客の眼に印象づける。

柑橘産業の急速な発展は、ここ数十年の間に吉田町の山相を一変させてしまったが、たとえ、愛媛蜜柑のふるさと、立間の中心に位置する寺家部落の山々にしても、かつて「八幡宮記」に「森々万樹・溪山幽者」として記された趣はさらになく、また、旧藩時代に伊達氏の御立山・御用林として保護されてきた陣屋周辺の山林も、保安林その他として保有されている一部をのぞき、そのほとんどが解放されて、それぞれ蜜柑園にと変貌をしたのである。

町内に現在山林として残されているものは、全町面積の約二・五割、一二平方軒(昭四四—吉田町産業課調)にすぎず、これらの山林には暖帯林地特有の針葉樹である「ま

つ」・「スギ」・「ヒノキ」の類が植栽されている。

自生のものとしては、明治四十年代に執筆された「玉津郷土誌稿」に、郷土の植物として数百品目があげられているが、いずれにもせよ、吉田地方特有の草木としてとりあげるほどのものはない。ころもに「立間村ホノギ調」(宇和誌材)から旧立間村の小字名をひろってみると、「柏木・なばら・柿畑・ツタ・葛原・長藪・竹ヶ市・国木・茶堂・椎ノ木山・大国木・杉・尾花・楠谷・竹野・馬草・ツガノ口・ハジカミ」など、植物にゆかりの地名は数多く、往古の植物分布の一端がうかがわれておもしろいが、これといったものはないようである。

柑橘園が整備され、造林のゆきとどいた吉田町では、もはや原生林など見るすべもないが、それでも、植林に適しない急峻な傾斜地などでは、いくらかは往時の面影をしのぶこともできよう。温かい海岸部の乾燥した山肌には、「ウバメガシ」(通称まめぎ)・「トベラ」などが自生しているし、吉田湾に影をおく檜の山一帯の「クスノキ」・「しい」・「ヤマザクラ」など、若葉のころの眺望は格別、また犬尾城の秋をいろどる「かえで」・「ヌルデ」の紅葉はことに美しい。